

心の傷 今も深く

原因は飲酒運転だった

昌幸さんは、涼香ちゃんの15分後に車で家を出た。いつもすいている道が渋滞していたので、不思議に思っていた。その時だった。

「子どもさんが事故にあつて大変だ」と近所の人が教えてくれた。昌幸さんは車を乗り捨て事故現場に走った。だが、すでに遅かった。そこには泣きじゃくる二人の兄、動かない涼香ちゃんの姿があった。

運転していた男性は早朝から焼酎を飲んだあげくの居眠り運転だった。

その後、搬送先の病院で必死に救命処置が施された。しかし医師の口から出た言葉は「娘さんは助かる見込みがありません」という絶望の言葉だった。涼香ちゃんの7年6カ月の短い一生が終わった。

大崎さん夫妻は、ただぼうぜんとその場に立ちすくんだ。今まで生きてきて経験したことのない長い時間が流れた。

あのとき、ユウコト...

昨年2月の朝、加害者の男性が突然、大崎さんの自宅に現れた。白と黄色の花束を手に「遅くなりすみませんでした」と頭を下げた。服役後、仮出所して3カ月がたっていた。

3カ月後、再び加害者の男性がやって来た。「ユカちゃんを殺して申し訳ありません」。礼子さんの声は思わず上ずった。「うちの娘はユカじゃない。涼香です」。

「毎月、月命日にお参りに来ます」。男性はそう言うて、消息を絶った。

妹の死から6年、二人の兄は高3と高1になった。

小学校の運動会、修学旅行、卒業式。中学校の入学式…。二人の兄は、涼香ちゃんの同級生が成長する姿にどうしても妹を重ねてしまう。「どうして、あの時僕は妹を助けてやれなかったんだろう。」「もし、あのとき妹の手を引く張っていたら、助かっていたかもしれない。」「二人の兄の心には、今も傷が深く残っている。



涼香ちゃん(右)と兄・佑輝君は、いつも一緒に遊んでいた(大崎さん提供)

大崎涼香ちゃん(7歳で死亡)

平成12年11月28日、二戸市の県道で集団登校中の小学生の列に、近所の男性(当時63歳)の軽トラックが突っ込み、大崎涼香ちゃんら二人が死亡、6人が重軽傷を負った。男性からは呼気1ℓ当たり0・25ミリのアルコール分が検知された。男性は業務上過失致傷罪と道交法違反(酒気帯び運転)の罪で懲役4年(求刑懲役5年)の判決を受けた。涼香ちゃんの遺族は男性に対して損害賠償訴訟を起こし、判決は兄2人についても慰謝料計300万円を認めた。

あまりにも悲しい結末

「車には気を付けてね。ちゃんとルールを守って学校へ行くのよ」。この悲しい事故が起きるまで礼子さんは涼香ちゃんに毎日口癖のように言っていた。礼子さんは訴える。「子どもがどんなにルールを守っても、ルールを守らない大人がいる限り、悲しい事

故は繰り返されます」。

平成18年11月28日。7回忌を迎えた朝、大崎さん夫妻は、事故現場に花束を供え静かに手を合わせた。

「もう、こんな思いは誰にもしてほしくない」。二人は飲酒運転の撲滅を目指し署名活動を続ける。家族は毎日、仏壇の前で手をじつと合わせる。大崎さん一家が囲む食卓には今も涼香ちゃんの遺影と食事が並ぶ。